高校生学習文献シリーズ NO.13

海老原問題と日本反スターリン主義運動

―自称新左翼・知識人の頽廃―

朝倉文夫

反戦高連中央書記局情宣部

わたくしは、この講演のテーマとして、「海老原問題と日本反スターリン主義運動―自称新左翼・知識人の頽廃―」という題を設定しました。海老原問題をたんに虐殺行為そのものにたいする憤激にとどめることなく、これが中核派による革マル派系学生への虐殺行為であったということ―日共による革マル派の学生の虐殺でもなく、そしてまた中核派による社青同解放派の学生への虐殺でもないところの、「反スターリン主義」をなのる中核派による、そして同じく革命的共産主義運動の一貫したたたかいを展開している革マル派にたいする政治的な攻撃としてそれがあったということ―、このゆえに、海老原問題を、日本反スターリン主義運動にとっていかなる意味をもっているのか、という点でとらえ返していくために、わたくしはあえてこのテーマを設定したわけです。

したがって、以下、第一に海老原問題とははたして何であるのか、第二に梅本克己の反マルクス主義への転落とその根拠、そして、第三に反スターリン主義革命的左翼のたたかい、こういった問題に関連して、のべていきたいと思います。

第一章　海老原問題とは何であるのか?

最初に、海老原問題とは何であるのか、その問題についてまずもってあきらかにしておきたい。なぜなら、海老原虐殺事件をへて、すでに二ケ月の日がたっているにもかかわらず、この二ケ月の間、左翼的な諸党派の運動のなかにおいて、あるいは左翼的な知識人のなかにおいて、この海老原問題にたいしては全体として沈黙と、空々しい評論がわれわれの前にあらわれているにすぎない―まさにこの事態をいかなるものとしてとらえていくのか、を問題としていかなければならないからにほかならない。

A　沈黙と空疎な評論

すでに、これまで多くの機会にあきらかにされてきているように、海老原君の虐殺ののち、今日まで中核派は、その内部においてはともかく、外部にたいしては一切これについて口をとざして語らない、こういう態度をとっています。そして、多くの労働者、人民から質問をうけたばあいは、「黙秘権を行使する」という態度であたることが、内部でいわれているような状態です。こうしたかれらの今日の事態、すなわち海老原問題で労働者人民にたいしては「黙秘権を行使する」―あたかも権力の取調べの前にかれらがたっているかのような―という現実に、なぜかれらがさらされねばならなかったのか?こうした疑問を抱かねばならないのは、ひとり中核派にたいしてのみではない。一切の反代々木左翼もまた今日にいたるも、海老原問題について、徹底した沈黙を守っているからにほかならない。

わずかに、今日ML派が「沖縄における、これまでの革マルとの関係を自己批判する」と称して、「このかんの中核派と革マル派の内ゲバは、不毛な党派闘争であり、解放戦線として介入すべきではない」(『赤光』九月二日号)と自己批判し、実質上海老原問題での中核派の対応と己れとのあいだに一線を画すことを表明している。しかしそれは、海老原虐殺事件で問われている深刻な問題について、ML派があらかじめ予防線をはり、自己保身をきめこむという態度であることを意味するものにほかならない。

こんにち、反代々木諸派においては、このように海老原問題についてこたえることができない。これは、いうまでもなく海老原問題への安直な対応が、その組織の死をもたらさざるをえない決定的な問題をなげかけている―こうかれらが直観しているがゆえに、かれらは、海老原問題について自己の見解を表明することができず、中核派と同様貝のようにおし黙っているのである。

われわれは、かれらが直感しているところのもの、それを意識的にえぐりだし、そしてこれをわれわれの立場から解明し、これへの主体的な対決をかちとっていくこと、ここに現段階における革命的な左翼をめざすすべての労働者、学生、高校生の革命的な課題があるということを、はっきりと確認する必要があるだろうと思います。

こんにち、反代々木諸派は貝のように沈黙し、海老原問題が遠ざかることを心に念じながら種々の闘争へとのりうつり、そうすることにより思想的にきわめて腐敗した姿をさらけだしている。いわゆる「アジア革命派」というのが今春登場した。これは「極東革命」をかかげる第四インターナショナル、すなわち俗流トロツキスト、それから毛沢東主義に純化しつつあるところのML同盟、この二つの組織のほかに、昨年の拠点スト方針の破産で決定的な致命傷を負った共労党が、この破産の隠蔽策として、アジアにおける後進国人民のスターリニスト的民族主義運動のもり上りへとのりうつることによって、いわゆる「アジア革命派」というものがつくりだされていった。この「アジア革命派」の総体としての見解は、先進国階級闘争のスターリニスト的・社民的歪曲の問題を没却し、先進国の革命運動は絶望的であるとあきらめ、他方、後進国の民族闘争がもり上っているという現象論的認識に立脚して、後進国の民族主義的。スターリニスト的運動に便乗し、その運動の進展によって先進国のたたかいははじめて推進しうる、という主張にまとめられるといえよう。だからかれらの主張は、必然的に後進国人民のたたかいのスターリニスト的側面の問題性が没却され、むしろ先進国のプロレタリアートはそれに学ぶべきものとされざるをえないのであり、このゆえにかれら自身が、[illegible]主義への接近とならざるをえないのだ。「日本人民が抑圧民族であることを自己批判する」というような非マルクス主義的見解は、かれらの腐敗の紋章にほかならない。

しかし、問題なのは、こうした堕落した諸党派にたいして、ブクロ=中核派やあるいは純粋レーニン主義への転換をキャッチフレーズにしていたところのブロント、ブントの諸君が、これら「アジア革命派」に思想的、組織的に完全に屈服してしまっているということである。統社同=フロントは、今春の段階においては先進国革命の決定的な重要性を語っていた。だがこの八月に行なわれたかれらの全国委員会の声明(『先駆』二一三号)においては、後進国階級闘争の決定的な重要性と先進国の闘いの限界、というような見解へと、かれらは一八〇度の転換を平然とやってのけ、「アジア革命派」に汚染されたかれらの姿をさらけだしている。

またブクロ=中核派は、いまや「被抑圧民族迎合」主義ともいうべき反マルクス主義的な主張へと転落している。いうまでもなくそれは、かれらの大衆追随主義的運動路線、「アジア革命派」と本質的には同様の「玉つき革命論」への転落、そしてスターリン民族理論へのはてしない後退を根拠にしたブクロ=中核派の今日的堕落の集約的表現にほかならない。

まさにこのような「アジア革命派」と称される民族主義的な、あるいは毛沢東主義的な傾向への対応すらできないという腐敗しきった八派連合の現状からして、かれらにおいては海老原問題への対決などはなそうにもなしえないのである。

さらにわれわれは、右のような諸党派の現状のみならず、知識人におけるこの問題への反応についても、簡潔にみておく必要があるだろうと思います。なぜなら、こんにち、海老原問題をめぐっては、ごく少数の知識人をのぞく圧倒的多数の自称進歩的知識

人が、あるいは沈黙か、あるいは空疎な「内ゲバ反対」を叫びたてることしかできないという事態に、こんにちの反代々木左翼と同様、進歩的知識人の腐敗が示されているからである。

かつて中国核実験が強行されたさいに、中国核実験にたいしいかなる態度をとるのか、というテーマで「早稲田大学新聞」がおこなったアンケートにたいしては、二十数名の知識人が回答をよせていった。だが今回の海老原問題においては、その半数以下の人間しか答えることができないという事態に、すなわち七〇名近いアンケートにたいして、一一名しか回答がよせられない、というような事態のなかに、端的にこの問題への知識人の対応の現状が示されている。しかも自己保身的沈黙となんらの問題の解決にならない「内ゲバ反対」の道徳的確認とに、ほとんどの知識人の対応がとどまっている。

海老原虐殺問題にたいし、自己の存在をかけて対決しようとしているのは、中核派にたいする最初の弾劾を公然とおこない、反スターリン主義運動そのものの問題として一貫して問題を追求しつつある高知聡、この殺人事件にたいして「具体的な感情」をもってこれと対決しようとしている大久保そりや、さらにかのハンガリア革命に際し対決しえなかった自分の反省を媒介としながらこの問題への対応をなそうと表明している雪山慶正、そして外人べ平連のダン・フィリパイ、以上の四人にすぎない。他の回答者は、すべて「内ゲバ一般」への道徳主義的かつ客観主義的対応にとどまっている。

知識人における、全体としてこのような沈黙した事態、こうしたなかで、珍しく『現代の眼』一〇月号に匿名で――ある時は映画俳優として、また映画雑誌の編集者として、またある時には反代々木左翼の周辺にたむろする評論家として立ちあらわれる松田政男という人間が――海老原問題について簡単な文をよせている。しかし、その内容たるや、埴谷雄高のかの政治哲学――「憎悪の哲学」――を冒頭に引用しながら、結論では、それとは似て非なる魯迅の言葉を引用し「新左翼一〇年のなかで流された血は、他のものであがなうことはできない。血は血で洗わねばならぬのだ」などときわめて無責任な悪煽動をおこなっているのである。「血を血で洗う」ことがこんにちにおける問題ではない。われわれはすでにあきらかにしているように、海老原虐殺へと追いこまれざるをえなかったブクロ＝中核派――しかもこのような行為にたいして自己批判することもなしえず、いわゆる「黙秘権の行使」を表明しているにすぎない中核派――を革命的に解体することによって、海老原君の死にこたえなければならない。われわれのこの目標を実現するための党派闘争の展開とはまったく無縁な、かつ無責任な悪煽動でしかない、という点で松田政男のそれは、腐敗した知識人の特異な例として、われわれの記憶にとどめておかなくてはならない。

沈黙と空疎な評論に示される、反代々木左翼。知識人の判断停止状況の根拠にあるもの、これこそ逆に海老原虐殺問題の深刻性を語っているのであって、この深刻性とはなんであるのか、という問題について、あきらかにしていかなければならないと思います。

B　海老原問題は、いわゆる内ゲバ問題か？

すでにのべてきたように、わずかな発言者のなかでその多くが海老原問題を内ゲバ一般の問題として扱っているわけですが、そもそも海老原問題を、いわゆる内ゲバ問題としてとらえることができるのか、ということからわれわれは問題としなくてはならない。

海老原虐殺を「内ゲバの犠牲」ととらえる種々の見解には、しかしそれが集団リンチ殺人にまでいたる必然的根拠はまったくとらえられない、ということにかんして、まずあきらかにしなければならない。たとえば、梅本克己の主張がそれであり、三浦つとむがそれであり、あるいは井上清もまたそうである。かれらは今回の問題を内ゲバ一般の問題としてとらえることにより、逆にかれら自身が内ゲバ一般にマヒしてしまっていること、そして今回の海老原問題の決定的な重要性というものについて、かれらはとらえることができないことを自己暴露しているのである。

われわれは、海老原虐殺を、種々の党派のあいだでの党派闘争の展開のなかにおいて必然的にもたらされたもの、というようにとらえることはまったくできない。いわゆる内ゲバすなわち党派闘争の論理から、完全に逸脱した集団リンチ殺人事件として、この海老原虐殺事件をとらえかえさなければならない。だから、高知聡氏がいうように、「かれは『犬』のように殺された。かれは『狂犬』たちに惨殺された。かれの死は不可避の闘死ではなく『犬死』であった」（『前進社への抗議文』）ということの意味がとらえられなければならない。この点をわれわれは海老原問題の決定的事実としてはっきりつかんでいく必要があるだろうと思います。過去においても党派闘争の過程で死者がでた、という歴史がたしかにあるわけだが、しかしそうした一定の衝突のなかでもたらされた死とは格段の区別においてとらえられなければならないところの、集団リンチ・殺害事件としてわれわれは今回の海老原虐殺をとらえるのは、そのためである。

海老原虐殺をこのようにとらえようとするならば、なにゆえこうした事態が「反スタ」を自称するところの中核派によってもたらされ、また反スタ革命運動を一貫して展開している革共同革マル派とそのもとで闘っていた活動家にたいしてなされたのか、という問題として同時に解明していくことが決定的に必要なわけです。

したがって、海老原虐殺問題との対決というのは、虐殺という形態の問題にとどまることなく、反スターリン主義運動とのおのれの主体的対決、さらには前衛党建設への主体的対決の問題をもとらえかえしていかねばならないとすらいえるわけです。いまから一四年前、ハンガリア問題と対決し、おのれのスターリン主義からの脱却の決定的な問題としてこれと対決していったのと同様に、あるいはより身近かな問題として、反スターリン主義をめざす左翼や知識人にとって深刻な問題としてこれは提起されている――こういうものとしてとらえていかなければならないと思います。

であるとするならば、この海老原虐殺という行為にたいして、われわれはいかなる角度から弾劾していかなくてはならないのか、という問題へと論点を進めていかねばならない。

1956

C　なにが弾劾されるべきか？

この虐殺行為という問題について、われわれが対決していくばあい、第一にあきらかにしなければならないところのものは、〝政治目的からの規制を欠いた無限界的暴力〟、この問題についてまずもって弾劾していかなければならない。

このことは同時に、革命運動において暴力一般が否定されるのではなく、革命運動においていかなる目的のもとで暴力が行使されるのかというように問題をたてていかなければならないことを意味する。したがって暴力一般への反対や内ゲバ一般への反対は、なんら問題にアプローチする立場ではない。一般に、革命運動において暴力行使が問題となるときはいかなるときであるか、いいかえるなら、暴力行使の必要はなんであるのか、という問題としてとらえていくばあい、革命運動における暴力行使の基準を喪失してしまったものとして、われわれは、ブクロ＝中核派による海老原虐殺問題を弾劾していかなければならないのである。

われわれは、国家権力を打倒するために、そしてその一環として種々の階級闘争をくりひろげている。この種々の階級闘争の過程において、国家権力に対決するさいに暴力を行使するということは、代々木スターリニストでないかぎり原則的に認められていかなければならない。しかし国家権力を打倒するために闘いぬいているそのばあいの暴力と、国家権力にたいしてではなくそれを打倒するために闘っている諸党派にたいし暴力を行使するばあいとは、あきらかに区別されなければならない。後者のばあい、すなわち、国家権力を打倒するために闘っている諸党派にたいして暴力を行使するばあいは、階級的な、そして党的な基準というものが厳守されなくてはならない。このことはどういうことかというならば、反階級的な行為、そして反党的な行為、かかるものにたいしてのみ、暴力は行使される。こうした革命運動における明確な基準というものをわれわれは確認しておかなくてはならない。

しかもそれだけではない。このばあい、恣意的に反階級分子であるとか、反党的分子であるとかいうようなことが規定されてはならない。あきらかにそれが組織の責任において、したがってそのばあい組織の生命をかけておこなわれていくのであるからして組織的に暴力行使はなされなくてはならない。

だがしかし、こんにちの中核派の海老原虐殺は、なんらそのような明確な政治目的もなく、そしてまだなんらの基準もなく、ただ虐殺すること、そのことのみがむしろ自己目的化されている。こういうものとして、すなわち政治目的からの規制を欠いた無限界的暴力の行使として、われわれは糾弾しなくてはならない。それが第一の問題であるわけです。

そして第二の問題は、このような政治目的からの規制を欠いた暴力行使になにゆえこんにちのブクロ＝中核派がおちいらなくてはならなかったのか、という問題であって、それがブクロ＝中核派のこんにちの組織的腐敗をもたらした思想的頽廃という問題にほかなりません。

こんにち、ブクロ＝中核派は、かの六月闘争における大衆的な高揚――しかし、全体としてはらまれていた、六〇年安保闘争と質的になんらことならないところの小ブルジョア的高揚――かかる事態をのりこえていく視点をなんらもつことなく、カンパニア主義的に量的拡大のみを自己目的化し、そうすることによって昨年のかれらの「一一月決戦」論の破産を隠蔽しようとしてきた。昨年の「階級決戦」主義パラノイアの破産の隠蔽策として、六月のカンパニア主義的な運動が企画された。にもかかわらず、昨年秋のわが全学連、反戦青年委員会、反戦高連の階級的な佐藤訪米阻止闘争と、その過程でつみあげられてきた労働組合内部における主体的な力量を基礎にし、六月二三日に、一切の既成左翼と反代々木左翼が提起することすらできなかった政治ストライキ闘争を、職場で断固としてうちぬき、それらを先頭にしながら六月反安保闘争の敗北のなかにおいて革命的な七〇年代闘争の展望をきりひらいていった。われわれの決定的なたたかいによって、ブクロ＝中核派の破産は再度鮮明にされていった、ということができると思います。

まさにこの革命的労働者・学生・高校生の六月闘争の革命的な展開のまえに色あせ、なんびとも否定しえない破産がつきつけられることによって決定的においつめられたブクロ＝中核派は、この危機を打開していくために伝統的な「革マル＝反革命」というレッテルをかれらの内部に暴力的に――かれらの活動家にたいしてすら暴力的に――ふきこんでいった。こうしたかたちで政治主義的なのりきり策がはかられようとし、海老原君の虐殺がもたらされたのである。

したがって、われわれがふまえなければならない問題は、デタラメきわまりないジグザグをおこないつつも六七年以降かれらが基本的におちいった階級決戦主義＝革命主義という誤謬――すなわち現段階における階級闘争を主客諸条件の恣意的分析にもとづいて、直接革命闘争として展開していこうとする誤謬――の破産を隠蔽するものとして海老原虐殺がおこなわれたのだということである。これはわが反スターリン主義革命的左翼のたたかいにたいする反階級的な、反党的な敵対行為にほかならない。かれらの階級決戦主義の破産の隠蔽策、これへのわれわれの党派闘争の展開におびえた技術主義的のりきり策として海老原虐殺はもたらされたのだ。という海老原問題の本質的な問題点をおさえていく必要があるだろうと考えます。

だから、一部の諸君がいうように海老原虐殺問題は「暴力的党派闘争のあり方」の問題であるとか、「暴力的衝突の日常化という現在の党派闘争にその根源をもっている」とかいう点にあるのではない。まさに、さきにのべたような、ブクロ＝中核派の規制を欠いた悪無限的暴力と、そのような暴力を行使するハメにいたらざるをえなかった、かれらの根底的な破産の最後的のりきりとして、海老原虐殺問題の本質をわれわれはとらえていかなければならないと思います。

それゆえ、海老原虐殺は反スターリン主義運動が生みだしたのだ、というような井上清のかの「サディズム論」や、三浦つとむの「組織エゴイズム論」とはまったくちがった地平において、われわれはこの問題をとらえていかなくてはならない。と同時に海老原虐殺という行為から直線的に問題をたて、もはや中核派は反スターリン主義ではない、というように弾劾していく――これはあとでのべる梅本克己とわれわれとの直接的な論争においてかれが表現していったことであるが、同様に対馬忠行においても「中核派は『反スタ』色がすっかりはげてきたが、こうなっては、革命団体としての資格喪失である」というかたちで表現されている――ことでもない。あきらかにかれらの虐殺という行為にのみ目をう

ばわれているかぎり、集団リンチ殺人にまでいたらざるをえなかったその背後の必然性、すなわち虐殺という偶然性と虐殺に至らざるをえなかった必然性、この根本的問題に関して主体的にアプローチしていくことはできない。いいかえるなら、反スターリン主義革命的左翼のたたかいの問題として主体的にアプローチしていくことはできない、ということをはっきりさせておく必要があると思います。

『朝日ジャーナル』に掲載された梅本克己の今回の問題への対応を、われわれがことさらとりあげるのは、その点に関係しており、梅本克己が沈黙や内ゲバ一般への反対とはちがって、一見海老原虐殺問題を反スターリン主義の問題としてとりあげようとした、という点にあるからにほかならない。しかし同時に梅本の対応の内実が、海老原虐殺を生みだしたブクロ派と対決するわが同盟への敵対以上のなにものでもないことをあきらかにし、梅本克己にしめされる反スターリン主義革命的共産主義運動の同伴者をも無慈悲にわれわれがふみつぶして前進していかなくてはならない、かかる地点にたっていることをあきらかにするためにも、梅本克己の問題をつぎにとりあげたいと思います。

第二章　梅本克己の反マルクス主義への転落

『ジャーナル』論文の反動性

すなわち、梅本克己は、『朝日ジャーナル』九月六日号の「何を革命するのか ― 党派の論理と革命の論理 ―」と題する論文において、海老原問題にふれながら、基本的には「内ゲバの犠牲」であった、という認識に立脚し、問題はそれへの革マル派の対応にあると称して、革マル派の対応は「復讐の論理」であり、「政治の論理」であり、さらに「組織の論理」であって、このような論理に「革命の論理」が対置されなければならない、というような見解をあきらかにしている。そうすることによって海老原虐殺という行為に象徴されるブクロ＝中核派の組織的腐敗、思想的頽廃、さらには道徳的堕落については一顧だにすることなく、もっぱらそれへの対決にたいする非難をおこなっている。

それのみではない。梅本は、論文の結論において「今回の事件ははじめから殺人を意図しておこなわれたものではない」と意識的に強調し、今日大衆的に糾弾されつつあるブクロ派の海老原虐殺行為を免罪するに近い発言すらおこなっているのだ。つまり、海老原虐殺をまったく偶然的なものへと解消し、ブクロ派への先進的労働者学生の反撃のたたかいにたいして悪罵を投げるという行為をおこなっているわけである。

梅本克己のこうした見解の第一の欺瞞性は、海老原虐殺という行為がすでにのべたように衝動的な事態であると同時に、ブクロ＝中核派において必然的なものとしてもたらされた、という海老原問題の決定的な本質を意識的に隠蔽しているということである。

われわれが衝動的であると同時に必然的である、というばあいにおいては、たとえば現在金山以下中核派の学生指導部が逮捕され、しかもぞくぞくと自供者が生みだされていっているなかで、あらたにあきらかにされたことがらがあるとしてもやはりそれはかわらないのである。すなわち海老原君がリンチで瀕死の状態になっていたまさにそのときに、ブクロ派の指導的メンバーは「かれをこのまま帰したら大変なことになってしまうから、いっそ殺してしまえ」といいリンチを続行した、ということがいわれている。こうした自供がもし事実だとしたばあいにおいても ― つまり殺人という行為があらかじめ確認されておこなわれたとしてもいぜんとしてわたくしは、海老原虐殺という行為を中核派が組織的に、意図的におこなったのではなく、集団リンチの局限としての殺人にほかならなかった、というようにとらえているわけです。

なぜわたくしがあえてこんなことをのべるのかというと、あきらかにブクロ組織においてその党的目標から、あるいは階級的な目標から意識的に殺人行為にふみきるというようなものとして殺人がおこなわれたのではないということ、いいかえるなら党的、階級的基準などが問題とすらならない状態のもとでそれがもたらされたものであったということ、このことをはっきりとらえておく必要があるからです。この党的な、階級的な政治目的に規定されない、つまり海老原君を殺害することによってなんらかの政治目的を実現するとか階級情勢の変化をもたらすとかいう目的のまったくないかたちでの、暴力の無限界的な発揮ということがまずもって問題とされなければならない。と同時に、このような殺人をもしかねない状態にこんにちのブクロ＝中核派がおいこまれていたのだ、という必然性をも同時にわれわれはあきらかにしていかなければならない。

わが革命的左翼においつめられ、その技術主義的のりきりの結果として、組織的な腐敗と思想的な頽廃と道徳的な堕落とが一挙に、同時にやってきたような、こうした事態がこんにちかれらにもたらされているということ、まさにそれゆえにブクロ官僚は、社青同解放派にでもなく、日共にでもなく、わが革マル派系学生にたいして殺害という行為をおこなわざるをえなかったのだという殺害事件の本質をあきらかにしなくてはならない。だがしかし梅本克己は、「内ゲバの犠牲」として海老原虐殺に示されるブクロ派の行為を免罪し、その本質を隠蔽し、そうすることによって「内ゲバ」一般の道徳的な問題へと論点をすりかえるという操作をおこなっているのである。これがかれの論文の第一のマヤカシである。

第二の問題は、このようなマヤカシ操作を前提としながら、われわれが中核派の殺害行為にたいし八月五日からただちに展開してきた種々の党派闘争と、その一環としての八月一四日の法政大における闘いを、梅本はなんら総体としてとらえることなくすなわち梅本克己においては八月一四日以外は革マル派の対応はなかったかのごとき認識に立脚しており、八月一四日そのものについてもブルジョア新聞のいう「報復リンチ」なるものにたいしてのみ目がむけられているにすぎず、八月一四日の法政大における断固とした抗議・追悼集会と同時にかれらの反党的行為への反撃として特殊に用いられた暴力の行使、という論理的な関連をなんらとらえることができない ― 雑炊的な頭脳で腐敗した対応をおこなっている。雑炊的な頭脳で対応しながらかれは、われわれの組織的反撃（いわゆる“階級的復讐”）を、「復讐の論理」でありスターリン「粛清の論理」をうけついでいるものにまでわが革マル派をまつりあげるという行為をおこなっているのである。

だがしかし、そこではかれがいうところのスターリン主義は「粛清の論理」に等置されてしまっているのであり、このように等置せざるをえない梅本克己の思想的頽廃についてわれわれは問題としなければならない。スターリン主義が「粛清の論理」と等置できないことは、革命的高校生運動を担っているすべての諸君においては、前提の〃ぜ〃の字にもならないような、あたりまえのことであって、もはや先進的な中学生でさえそのことは知っている。あらためていうまでもなく、ロシア十月革命の実現にもかかわらず革命ロシアの孤立、ロシアの政治・経済的な後進性、そして世界革命の遅延、という外的条件のもとでスターリンその人が一国で社会主義の建設は可能であると断言し、それにともなって各国の革命が一国的にきりはなされた。この一国社会主義の建設と革命の理論によって、ロシア共産党、ロシアの国家、さらには国際共産主義運動がスターリン主義的に変質していったものとして、われわれはスターリン主義をとらえるのである。現代世界に生きるマルクス主義者としてはまったくあたり前なこのような把握を、梅本克己は完全にないがしろにして、おのれの社会科学的無知をさらけだすかのようにスターリン主義は「粛清の論理」であるというような断定をおこないながら、わが革マル派を「粛清の論理」にとらわれたスターリン主義者にまつりあげているのである。

ここで粛清そのものについてのべるならばわれわれは、粛清一般を道徳的に非難すべきではない、ということである。明確な反階級分子、反党分子にたいして、いわゆる粛清がおこなわれるということは、革命運動のなかにおいて必然的なものであって、スターリンのばあいにおいて問題にされなければならないのは、スターリン個人の私的利害を貫徹するための手段としてそれが行われたにすぎなかったということ、つまりトロツキーをはじめとする左翼反対派を虐殺し、スターリン主義的な国家と党、国際共産主義運動の変質の手段としてそれが使われたにすぎなかったということ、このことをわれわれは、はっきりさせておかなければならない。

だから、一つの歴史的事件をここであげるならば、レーニンが労働者階級の利益のために反階級分子に対して取った容赦ない態度について、われわれはよしとすることができる。レーニンは革命後のロシアの内戦激化の只中で社会革命党員によりひきおこされた反乱やレーニン暗殺未遂事件に対し、いささかもためらうことなく、容赦ない態度で弾圧し、責任者を時を移さず処刑した。しかし同時にレーニンは、二一年のクロンシュタット反乱の直前にもかかわらず、反政府的見解を述べていた無政府主義者クロポトキンの死にともなう葬式という形をとった無政府主義者の一大デモンストレーションに対して実に寛大な対応をおこなった。一方では無政府主義者クロポトキンの革命ロシアにたいする種々の見解にたいして論争を展開しながら、他方では反階級的、反革命的分子にだいして容赦ない弾圧をおこなっていったということ、この態度こそまさに革命をやり遂げていこうとする組織において不可避なのだということを、われわれははっきり確認しておかなければならない。

だがしかし、「粛清」一般をスターリン主義に等置するという社会科学以前的誤謬を大前提とし、さらに革命組織といえどもブルジョア国家のもとにある以上ブルジョア的な「政治の論理」からあらかじめ自由ではありえないということを知りながらもそれを「否定する」と称して、わが同盟の組織的たたかいに「復讐の論理」だの「政治の論理」だのと悪罵を投げかけているのがほかならぬ梅本克己なのである。

ブルジョア政治の論理を根底的に打破し、革命の論理を実現しようとめざしている革命組織においても、この社会に現存在する以上、ブルジョア政治の論理を駆使しながら同時にこれを粉砕していくというたたかいが不可欠である。ブルジョア政治を否定すると同時にブルジョア政治を駆使しなければならないというこの二律背反、ここにまさに革命組織の現実への対応のパラドックスがあるのであって、このことを否定してあらかじめ純粋な「革命の論理」なるものをあてはめてそれを直ちに実現するわけにはいかない。それは、かのオーエンが資本主義社会において社会主義の模型を作ろうとしてパンクし、あるいは武者小路などの白樺派が「新しい村」を作ろうとしてパンクしたのと同様のユートピア的問題提起でしかない。

党派闘争の問題においても同様であって、革命組織はいわゆる現実政治にのっとって種々おこなわれている諸党派との対応からあらかじめ自由な存在であるわけではない。この当り前なことがらにたいしてあらかじめこれを「否定する」ということは、唯物論哲学者においてはありえないことであり、観念論的なものへと梅本自身が転落していることを示したものでしかないということを、われわれは公然と暴露していかなければならない。このような観念論的な主張がうみだされざるをえないのは、かれのいわゆる「実験思想」、すなわち社会的な実践と科学的な実験室での実験とを二重うつしし、実験室での実験をあらかじめパターンとしそれを現実にあてはめていく――なんら理想型ではないところの理想型から現実に天下る――という梅本克己の「実験思想」によってもたらされているのだということを、われわれはあきらかにし弾劾しなければならない。

さらにそうすることをとおしてわれわれは、こんにちの梅本克己の腐敗した立場がなににもとづくのか、という結論的な規定をおこなっていかざるをえない。すなわちそれが「反国家・反政治・反組織」思想という反マルクス主義的立場へのかの主体性論者梅本克己の転落という第三の根本的問題である。かれは「革命の論理」をかかげながら、「革命の論理」の内実として「国家解体の原理」、さらに「自己解体の原理」などといいだしはじめている。「自己解体」とはどういうことか、という点については「論理」の乱発と同様になんら内容的に示されていないわけであるけれども――この「自己解体の原理」という主張は、昨年以降階級闘争の一時的な小ブルジョア的高揚のなかでうみだされたノンセクト・ラディカルズの「自己否定」という言葉をおそらくは物真似したもの、というようにいってよいと思うけれども、――そうした「自己解体」という言葉を卒直にかかげることによって、かれはあたかも「革命の論理」を説明できたかのように思っている。

だから、そこにおいては、ブルジョア的な国家を粉砕しぬくための革命組織も、そしてその革命組織の一員としての革命組織成員も、この党と党員の関係についても、なんらふれられず、そしてまたブルジョア国家を打倒するための革命理論の構造にかんしてもなんらふれられないところの「革命の論理」であり、「自己解体の原理」というものになってしまっている。ということはい

いかえるならば、梅本の「自己解体の原理」なるものは、ノンセクト・ラディカルズの「自己否定」以下的な――なぜならいわゆる「自己否定」は哲学的な意味で、その限りにおいて一定の出発点となりうる余地があるが「自己解体」ではそれすら不可能だから――シロモノでしかない。そしてこのような「自己解体」が一切の前提であるという理論展開からするならば、革命理論も組織論もすべては「国家解体、政治解体、組織解体」という名のもとに「反国家・反政治・反組織」という、アナーキスト的主張と同様なものへと、かれは転落してしまっているといわざるをえない。

あらためていうまでもなく、アナーキストにおいては、レーニン的党組織は党員の自発性を抑圧する官僚主義的なものであると、いうようにとらえられる。つまり出発点としての個人、絶対自由な個人というものが――なんら共産主義的な規制を媒介にすることない個人が――語られると同時にこの自由な個人の絶対自由な連合としてのみ党が考えられることからして、党員も党組織も小ブルジョア的に歪められたものとしてとらえられざるをえない。そればかりではない。アナーキストにおいては、そうした小ブルジョア的自己の延長線上にしか革命が考えられないがゆえに、およそ革命理論というものは存在せず、たとえば帝国主義国家権力の打倒もスターリン主義国家権力の打倒も根本において区別されることなく、もっぱら「国家否定」とか「管理社会打倒」とかさらには「組織＝官僚主義否定」とかいう以上に語ることができない。アナーキズムの理論的誤謬はこのように一切にわたっているということ、そしてこのアナーキズムの理論的誤謬の最深の根拠が、小ブルジョア的"個"の絶対化にもとづいた、レーニン主義的党組織への否定というかれらの組織観に規定されているのだということ、このことを認識している者であるならば、けっして梅本克己のような堕落に陥いる危険性はなかったはずである。

だがしかし、こんにちの梅本克己は、スターリン主義を「粛清の論理」と等置するはじめての規定をもちいるのみならず、「反国家・反政治・反組織」の立場への転落を基礎にして、革命的労働者学生のブクロ糾弾のたたかいにたいしその外から悪罵を投げかけるという、反動的な立場に転落し、それを恥ずかしげもなく「反スターリン主義にアプローチしたゆいいつの立場」であるかのごとく錯覚している。だからこそわれわれは、この梅本克己の対応を、他の沈黙や「内ゲバ一般」への諸党派、諸知識人の対応とは区別して、明確に糾弾していかざるをえなかった。たんに機関紙でそれを表明するのみならず、われわれのこの批判にたいして予想される沈黙を許さないために、私と高知聡氏とは早大新聞とともに九月二三日に水戸にある梅本克己の自宅に赴き、無理矢理に口を開かせるという作業を展開してきたわけである。

B　梅本克己における「自己解体」の現実

だがしかしそこにおいて露呈した事実はなんであったか。というならば、あきらかにそれはわれわれの理論的な批判にたいしてまったく反論することのできない梅本の腐敗しきった現実、すなわち開口一番、「高知聡氏の批判は読みました。ごもっともと思いました。」という対応に示される、梅本克己における「自己解体の原理」ではなく現実、かかる事態にほかならない。だからそこにおいて三時間半の、梅本としては珍しく長い討論が展開されたわけだが、討論そのものも通常の感覚ではとても討論とはいえないわれわれからの一方的な理論的な批判とそれへの梅本の感覚的対応があったというにすぎない。かつて日本反スターリン主義運動が創成されるさいの一つの前提条件をかたちづくったともいえる梅本主体性論の残骸が目の前にころがっていたにすぎないという現実――三四キロしかないというその肉体的空洞もさることながら頭脳が完全に空洞化してしまっているという老哲学者の現実――をわれわれはまざまざとみつめざるをえなかった。

しかしともかく僅かながらの論争点を若干紹介するならばそれはおよそ次の四点にまとめられるといえよう。その第一は、中核派による海老原虐殺ははたして「内ゲバの犠牲」としてとらえうるか第二に、われわれの政治的反撃、その一環としての暴力の行使は絶対否定されるべきか、さらに第三に、「自己絶対化」におちいっているのは革マルの方かそれとも梅本か、そして第四に、そもそもスターリン主義とはなんであるのか、というような四点にわたって討論がおこなわれた。

第一の問題については、すでにわれわれがあきらかにしていることであるが、梅本克己の文章に中核派の殺害行為にたいする痛憤とそれへの糾弾の態度が完全に欠如していること、さらにわが同盟の対応と中核派のそれとを「暴力的内ゲバ」でくくり、その組織性ゆえに革マル派をむしろ非難するというような、まったく逆転した態度がとられていることなどを徹底的に暴露していった。これにたいして梅本克己は、「そううけとられるとしたら自分の文章表現が悪い。海老原殺しは無条件に悪いのであって、そのことはもう大前提になっていたから述べなかったまでだ」という。「だとするならばあの虐殺行為は、党派闘争の原則からすら逸脱した集団リンチ殺人事件として糾弾すべきであって、これと内ゲバ一般とを同列におくのは間違いではないのか」というさらにつっこんだ批判にたいして、「無論同列に置くことはできません」と梅本はわれわれの批判を基本的に認めながらも、「しかしぼくは、内ゲバを否定するわけですから。党派闘争を暴力に訴えることを否定するわけですから……」というような意見を表明した。

そこで第二番目の論争点、すなわち政治的反撃・その一環としての暴力行使は絶対的に否定されるべきか、という論争に移ったわけであるが、ここにおいてもかれの見解は不明瞭きわまりないものであった。つまりかれは、「内ゲバというものを消滅させるために革マルが決定的なイニシアティヴを握ったのだからその道を示してほしかった。しかし革マルの報復はこれを閉ざしてしまった。」ということを強調するだけであって、「自分は8・14を否定する」「しかしそれはどういう論理で否定されねばならないのか」と問いだすと「そこがうまく、かないんだけれども……とにかく結論からいえば否定する。」「これは"実感"であって、その論理を明確にするのは今できないから今後一生かかって検討していきたい。」というような驚くべき対応をおこなったわけである。このようななんら理論的な基礎づけをもたない「否定の論理」、これこそ梅本の発想の特徴をなすものであって、ここにかれのこんにちにおける腐敗の根拠が端的に示されているため、あとでべつに論ずることとしたい。

第三の論争というのは、彼がブクロ＝中核派とわが革マル派とを評して発言したときのことである。梅本はいう。「もはや中核派は現在の腐敗のままでは反スターリン主義とはいえない」と。

ではどういう意味においてかれが反スターリン主義ではないというのか、「どういうと「最近の『前進』を見ていると、街頭闘争にさいして石をいくつ投げたかということになってしまっている。これは反スタではない。」というのである。これはブクロ派の思想的腐敗についてのきわめて矮小な批判でしかない。そこでわれわれは「反スタでないということは思想的には一体どういうことなのか」とさらに問わざるをえなかった。梅本に満足な回答ができなかったことはいうまでもない。

ところで梅本は、われわれの追求からのがれるために「じゃ、革マル派が正しいかというと、すぐそうだともいえない。ともかく、革マル派には『自己絶対化』というものが非常に強い。」ということを「これまだ直感だが」と予防線をはりつつ主張した。自己絶対化とは何かというと「機関紙やなにかにおいて黒田君の文献が批判されたことがない。そしてなにかといえば黒田寛一のナニナニを見よ、と書いてある。これは毛沢東語録と同じではないか。内部で批判が許されてないからではないか。これでは創価学会とも同じだ」というのである!!

無知、といったのではあまりにも美化しすぎとしかいいようのない梅本克己のこの発言に接して、わたくしは無性に腹の立つのをおさえることができなかった。「いまの発言に最後まで責任をおうべきだ」とをまずはじめに確認して、わたくしは反論にうつった。

すなわち、徹底的な内部論争を通してたとえばこんにちの組織現実論はつくりだされていったし、この過程で黒田寛一氏の困難な条件のなかでの理論的苦闘もあった、という事実を提示すると同時に、そうした事実を一顧だにしない梅本克己のわが同盟への対応の"特殊性"、そしてまたあらかじめ組織はさまざまの理論があって対立していてよいのだという考え方に立脚した、思想的同一性を保持した組織へのねたみ心にほかならないことを批判した。しかもこうした梅本の考えは、すでに『朝日ジャーナル』論文に示されている。小ブルジョア的「個人の不安定な移り気を持続的な行動のなかに支えてゆく」ために組織が必要であると理解する梅本においては、組織はその前提としての共産主義的主体性の確立を喪失した集団とならざるをえず、アナーキスト的自由連合的組織観への転落を自己暴露したものにほかならないのである。このようなわれわれの批判にたいして梅本はなに一つ答えることができなかった。「自己絶対化」というのは、むしろ論証がなくて結論だけが正しいとされたり、理論的批判に沈黙して反省を回避したり、あるいはたえず印象や風評にもとづいてものを書いたりするにすぎない梅本克己自身のことだということをわれわれは断言して思想家としての梅本の根本的反省を要求していったわけである。

最後にかれとのあいだにおいて「スターリン主義とはなにか」という問題にかんして若干の論争がおこなわれた。「スターリン主義とはなにか」という問題は、『朝日ジャーナル』以上に珍奇な主張を含んでいるので、これからつぎに述べてみたいと思う。（付記――[illegible]）

われわれは、こうした論議ならざる論議を終えるにあたってまず、梅本克己のあまりの思想的空洞化状況にあきれかえるとともに、この空洞化状況を生みだした物質的根拠をあきらかにする必要があると考え、梅本克己がそもそも種々の政治的発言をするさいの情報源はなにかを質問した。われわれとしては、梅本がなにに基礎をおき、どれほどの検討ののち種々の発言をしているのか、たとえば海老原問題のようなきわめて責任ある発言をするばあいに、どれだけの文章の検討を媒介にして発言しているのか、ということを確かめるために、あえて質問したのであった。ところが、その質問がなにを意味しているかということをかれはとらえることができずに、つぎのように答えたのである。「ぼくはこんな身体だからものを読めない。党派の機関紙はほとんど読まない。ほら、この通り沢山積んであるでしょう。」とのべるかたわらに確かに封も切らずいろいろなものが山積みされている。そしてかれは恥ずかし気もなくこう語るのだ。

「ぼくの情報源は主としてラジオとテレビ。あなた方とくらべてぼくが有利なのは、昼間にラジオが聞けるということですよ。テレビもいいもの悪いもの全部みる。最近のテレビはなかなか面白いのをやってますよ。ばかになりませんよ。たとえば『男はつらいよ』なんかは……」

『解放』一七三号の小島論文には、梅本克己は「反[illegible]」主義運動に一度として真剣に対決することなく、茶の間でテレビにかじりつきながら市民的感覚をゆいいつの立脚点としている」というように書かれているけれども、確かにかれの生活はそのようなものでしかなかった。このようなテレビによる情報、これをゆいいつの基礎にしてかれはきわめて責任あるべき問題への対応をおこなっているにすぎない。ここに梅本の思想的変節の生活形態があるということをわれわれは見ておかなければならない。

ところで梅本との論争における重要な二つの点、すなわち最初にのべた政治的反撃、その一環としての暴力行使は絶対否定されるべきか否かという問題と、そもそもスターリン主義とはなにかという問題がつぎに暴露されねばならない。

キリスト論の観念性

いまや反スターリン主義革命的左翼のたたかいにたいする敵対者として現れざるをえなかった中核派の今回の虐殺行為、これにたいするわれわれの反撃の全体像について梅本はなんら認識をもっていなかった。テレビを情報源とするかぎりそれに認識をもてないかもしれない。だが法政大事件についてはブルジョアジャーナリズムで報道された「報復リンチ」という言葉に体現されるものとしてしかかれは考えることができなかった。こういう認識の誤りを前提とし、「党派闘争で暴力に訴えることを絶対に認めない。」という見解に立脚して梅本はわれわれの政治的反撃を否定する。

しかし、そうした反撃を否定するなら「そもそも反スターリン主義革命的左翼への攻撃として海老原虐殺がもたらされたので[illegible]あり、この緊張した関係のただなかにおいて階級的・党的基準にのっとり、組織的判断のもとに反撃の一手段として行使された暴力をも否定するなら――「右の頬を打たれたら左の頬をさし出せ」というキリストの立場に[illegible]それでは革命組織は現実のたたかいをくりひろげることはできず、階級と党の利害のために責任をもって[illegible]ことはできない。こうした批判にたいして梅本は「自分の意見はキリストになれということではない」と[illegible]かつて革マル派になにか新しい道をきり開こうとした[illegible]になにか新しい形が絶対に必要だ、と自分は感じている[illegible]答えるのみであった。「しかし、その『新しい道』というものが

具体的に提示されないかぎりは、やはりキリストになれといっているにすぎないではないか」ということで、キリスト論争がおこなわれた。

たしかに、かれの主観的意図は、キリストの立場をとらないとはいえ――梅本自身が語るのによれば、戦後梅本が田辺元と哲学論争をおこなったさい、プロレタリアートはブルジョアジーと抱きあって死ななければならないのか、といって、キリスト論と闘ったとのことである――「新しい道」をわれわれに要求しながら梅本自身がそれを提起しえない以上（そもそもそれは不可能なのだ）やはりキリスト論にならざるをえないのである。ここに、革命組織はいかに闘うべきかにかんし、なんの主体的なアプローチもしていない、評論家然とした梅本克己の本質が端的に示されているといわねばならない。

われわれは、反スターリニズム、革命的左翼への敵対として、海老原虐殺問題をとらえる。このことは、ブクロ＝中核派が反スターリン主義革命的左翼を名のりはしても、もはやそのような組織ではなく、反スターリン主義運動からの脱落者にほかならないという本質を同時に意味する。反帝・反スターリン主義をかかげながらも実質上反代々木中央左翼行動集団へ転落してしまったブクロ派が、われわれの原則的たたかいによって追いつめられ、決定的な死へおいこまれていったことから、かれらはその暴力的のりきり策をもくろみ、その必然的帰結としてわが革命的左翼のもとにたたかう学生の虐殺をおこなったのである。

これは、かの清水丈夫（岡田新）によって、革命運動のなかにもちこまれてきた暴力的党派闘争路線∧この暴力的党派闘争路線は、革マル派の理論であるなどという意識的な誹謗をやる輩がいるけれども、そうではない。このことは、六二年のかの全学連第一九回大会において、当時の社学同や構改派を暴力的に解体していくという革共同学対部長清水丈夫の路線にたいしてわれわれは反対し、思想闘争の限界をかかる方式でのりきっていこうとするかれらの方針を批判しながら、統一行動とイデオロギー闘争、組織活動などの関連をあきらかにし、こんにちの組織現実論にあたるものを解明しはじめた、ということ、それゆえ暴力的党派闘争路線との対決もまた第三次分裂のさいの重要な論争点となり、その結果としてわれわれの分裂はもたらされていったのだということ、この点をはっきり確認しなければならないわけである∨は、まず最初に六三年九月一三日の清水谷公園での大衆行動において、はじめて中核派が角材をもちいて統一行動からわれわれを分断する、という行為としてあらわれ、また翌六四年のいわゆる七・二事件においては、中核派の指導のもとに解放派、フロントもくわわり、早稲田大学で屋内集会をおこなっていたわが全学連の活動家にたいし、全員が武装して殴りこむという事態をもたらした。

このようなブクロ＝中核派の行為が大衆的な弾劾にさらされるや、かれらはあわてて「革命家は暴力では死なないのだ」などといいつつ、自己批判ぬきの転換をやってのけた。このあとしばらくのあいだは、暴力的党派闘争というものは、ほとんどみられなかった。

だが、六七年のかの羽田闘争の一時的な高揚を基礎づけるために、日本帝国主義の「臨戦体制化、参戦国化」なるものが語られ、「大衆闘争を直接革命闘争として展開せよ」という、いわゆる革命主義パラノイア症にかれらがおかされていったとき、そうした反プロレタリア的妄動貫徹の手段としてふたたび暴力的党派闘争路線が開花し、恣意的な、革マル＝反革命などというような論証なきレッテルがはりめぐらされた。まさにそうしたものの必然として、海老原虐殺にいたらざるをえなかったブクロ＝中核派の組織的腐敗と思想的な頽廃、それに道徳上の堕落を、われわれは弾劾していかなければならない。

したがってこの海老原虐殺という行為は、あきらかに党派闘争の論理から逸脱したところの、反党的な攻撃、反階級的行為といわねばならず、これにたいする対決は、たんに思想闘争、大衆闘争の展開にとどまらない。階級闘争の原則にのっとり、組織的な対決の一手段として暴力をもあえて行使し、反階級的行為の自己批判までわれわれは無慈悲な党派闘争を展開していかなければならない。

腐敗した殺人者集団＝ブクロ派にたいして断固たる対決をおこなっていくということは、けっしてスターリン主義に転落していくわけではない。逆にわれわれは、スターリンへのトロツキーの惨めな敗北からその組織論的根拠を明確に学びとっている。トロツキーがスターリンと闘うさい、かれの権力を背景とした処分や弾圧そのものに対決せず、理論的対立点をくり返し、公正な論争を要求していたにすぎなかったという事態、したがって革命的な分派を形成する組織方針ももちえず、スターリン主義者の弾圧にたいして、暴力的対決をあえていとわないという決意も欠如していたこと、このことによってかの世界の革命運動が、まったくの後退をとげざるをえなかった。かかる反省にふまえ、われわれは政治の論理を根底的に打破するために逆にそれを駆使し、そうすることによって革命の目標、すなわち帝国主義・スターリン主義と闘う革命的プロレタリアの闘いを絶対的基準とし、それを貫徹するための手段として党派闘争を展開し、この党派闘争の一モメントとして暴力をも公然と行使するのだ。そこに、階級的基準がきびしく問われることはいうまでもない。

しかもこうした行為は即自的ないわゆる「復讐」ではない。「階級的復讐」という言葉をわれわれが使っているからといって、それを個人的な私怨と同一視するのはまったく誤りである。われわれの「階級的復讐」とはブクロ＝中核派の政治的攻撃にたいして政治的反撃を展開し、それを通じてさらに腐敗したブクロ集団を解体していくということにほかならない。ブクロ＝中核派の解体を実現することによって、われわれは海老原君の死に報いなくてはならないのだ。

「スターリン主義＝粛清」論

梅本との論争の第二の重点は、いわゆるスターリン主義とはなにか、スターリン主義と粛清の関係はなにか、という問題である。

梅本克己は、スターリン主義は理解できるが粛清はどうしても理解できないのだ、というようにつぶやいている。どんなに誤った見解であろうともかまわないがしかし粛清という行為だけはやはり人間として許されない、という人間的な立場、さらにそれをつきつめるならば、手術のさい胸の骨をきるときのあの肉体的な痛みのようなものをゆいいつの立脚点にした粛清への非難がそこではおこなわれているにすぎない。このように、粛清がそれ自体として自己完結的にとらえられてしまうのは、なにを根拠にして

いっているのかといえば、スターリン主義組織論の必然性として、粛清の問題がとらえられているのではないということに起因する。

梅本においてはスターリン主義は一国社会主義建設の理論として、一面的にとらえられてしまっている。かれは、スターリン主義の規定と関係し、ソ連は社会主義かどうか、というと「一国で社会主義は実現できない。しかし、社会主義をめざそうとするかぎり、ブルジョア国家か社会主義国家かをわければ、やはり社会主義国家なのだ」という見解をのべる。ようするにスターリン主義は一国社会主義建設に等置されているのだ。

ここで決定的な問題は、孤立、後進、世界革命の遅延という外的な条件のもとで社会主義は一国でも実現できるとした、かの二四年のスターリンの理論、この二四年の一国社会主義建設論にもとづき、ソ連国家の「社会主義」建設のために各国革命が一国的に問題とされたにすぎない――このことからして当然にも、二八年のかのコミンテルン六回大会で提起された、スターリン・ブハーリン綱領で一国社会主義建設論と二段階革命戦略が定式化された――ということがまったくとらえられていないということである。だから梅本は、日本共産党を論ずるばあい、国際共産主義運動の問題として、スターリン主義の問題としてとらえることができず、ただもっぱら、日本共産党はもはや革命組織ではないということを確認する。だから日本共産党との対決は、「外ゲバなのであって内ゲバではない、自分は内ゲバは否定するけれども、外ゲバまでは否定しないのだ」というかの俗悪なノンセクト・ラディカルズと同様の主張へとおちいらざるをえない。これは、かれがスターリン主義について、一国社会主義建設のようなものを漫然と頭に思いうかべているにすぎず、革命理論的なアプローチを完全に欠如しているからにほかならない。

梅本がたとえスターリン主義について語り、反スターリン主義に同意していったとしても、スターリン主義＝一国社会主義建設としたうえでそれを基本的に免罪し、問題なのは粛清であるとする考え方、――一国社会主義理論と粛清とをきりはなす考え方――は、革命の問題を革命論的に、組織論的に考えていくことができないことの必然的帰結といわなければならない。ソ連一国の社会主義建設を自己目的化し左翼反対派を絶滅していくための手段として、変革の論理でなく現実の論理にあみこまれていったスターリン主義党と国家の必然性から、思想的対立をただちに行政的な処分、さらには粛清というかたちで解決していったという問題として、スターリン主義者の粛清の問題をとらえていかねばならない。こういうものとして、われわれは、梅本克己の「スターリン主義＝粛清の論理」なる腐敗した対応を弾劾していかなければならない。

したがってわれわれは、かの梅本克己の思想的空洞化は、なにゆえもたらされたのか、という結論に入らなければならない。

梅本の思想的空洞化をもたらしたもの

こんにち、左翼的運動のなかで、依然として梅本克己の本が多く読まれているといわれる。しかし、梅本克己の現状は、すでにのべたように、左翼的大衆になにひとつこたえうるものでないばかりか、むしろ、腐臭ふんぷんたる存在としてこんにちのかれは生きながらえているにすぎない。

（[illegible]頁下段につづく）

〔[illegible]頁から〕反スターリン主義運動をあらたに形成していった内的苦闘というものを、梅本は一貫して回避してきた。かれは日共の細胞に属していたけれども、病床にあってさいわいにもその苦闘を回避することができた。しかし病気が回復してのちのかれは、六〇年安保闘争における反代々木ムードに便乗し、日共から脱党したにすぎなかった。こうしてかれは、ハンガリア革命への主体的対決も、したがってまた日本反スターリン主義運動への対決もいちどとしてなしたことがないのである。

なぜかれが、そのような対決をすることなくこんにちまですごすことができたのか？それは、フルシチョフのいわゆる非スターリン化の波に便乗して、非スターリン化運動としてしかわが反スターリン主義運動を理解してこなかったがゆえに、こんにちにいたるまで、わが梅本はそのような対決を回避することができたのだ、といわねばならない。だからして梅本は、日本左翼思想の転換点を、ハンガリア革命においてではなく、六〇年安保闘争においてみたり、あるいはこんにちのように反スターリン主義が問われているときに「粛清の論理」なるものへの反対を道徳的にかかげることしかなしえないという腐敗した姿を自己暴露せざるをえないのである。ここには哲学的主体性を現実問題への主体的な対決として貫徹し、その主体的な対決を理論的にあきらかにしていくという苦闘をまったく放棄した、かつての主体性論哲学者の非主体性、いいかえるなら思想なき流行への愚応主義が端的に示されているのだ。

われわれは、このような反スターリン主義運動への腐敗した同伴者を徹底的にふみにじり、反スターリン主義革命的左翼のたたかいをさらに前にむかっておしすすめていく必要があるだろうと思います。そうしたいみにおいて、第三に反スターリン主義革命的左翼のたたかいについて理論的な問題を中心にしながら述べてみたいと思います。

第三章　反スターリン主義革命的左翼のたたかい

いまのべてきたように、梅本における反スターリン主義のとらえ方、あるいは中核派における反スターリン主義のとらえ方、こうしたエセな反スターリン主義を、このさい徹底的にあばきだし、これら一切の否定をとうして、反スターリン主義の道をゆがいつきり拓いていくための理論的構築を再度なしとげていくことが、現段階において要求されている。

A　梅本における「反スタ」の方法概念的把握

さて、梅本における反スターリニズムの理解は、方法概念的な把握とよぶようなものにすぎないということである。『現代日本の革新思想』という、佐藤昇、丸山真男との鼎談のなかで梅本は、つぎのようにのべている。「反帝は戦略目標、反スタは方法概念であって、反帝と反スタとを同一次元におくのはおかしい」。このように梅本は数年前に述べている。だが九月二三日、われわれが会ったときのかれは「わたしも反帝反スタである」などとおこがましくも語っている。このような無節操ぶりを発揮したからといって、それで反スタの理解がかれにおいて根本的にかわったわ

けではけっしてない。

「反スタは方法概念である」というこのとらえ方について述べるなら、第一にそれはスターリン主義の把握のしかたにおける決定的誤謬にもとづいている。そこでは梅本は、スターリン主義を個人崇拝、官僚の自己保身方式に等置してしまっている。つまりフルシチョフ式の非スターリン化の波に便乗してスターリン主義をとらえているにすぎないこと。このゆえにかれにおいては、反スターリニズムの問題も方法概念的なそれとしてしか理解されない、ということがもたらされるのである。

と同時に第二には、かれがスターリン主義打倒の実践的立場にたつことなく、評論家の高みからそれをヤユしているにすぎないこと、これが暴露されねばならない。こんにち革命的左翼たらんとするものがその結節点とするスターリン主義の問題が問われているとき、かれはソ連を「社会主義国家とよんでもよい」とか「理論的誤謬はともかく粛清が問題」とかいうように、平然と述べている。ここにも示されるように、かれにおいてはソ連国家と党、国際共産主義運動の変質がどのようなものであっても、それは第二義的なものでしかない。スターリン主義者が現に革命の名のもとに革命を裏切っているにもかかわらず、梅本においてはそれは棚上げされ、あいまいにされる――そうした評論家の立場から、労働者人民の苦闘を眺めているがゆえに、まさにスターリン主義打倒の問題について、決定的な問題としてうかびあがってこないのである。

こうしたおのれの腐敗を隠蔽するために梅本は、本のなかでこう述べる、「反スタを自称している組織は独善的セクト主義であり、自己絶対化である」と。この「独善的セクト主義、自己絶対化」なる評価をまさに露骨に示したのが、九月二三日のかれの対応（「黒田君の扱いが毛沢東語録と同様」で「創価学会と同様である」などという発言）であるわけだが、それは逆に梅本自身の思想家としての死を公然とさらけだす以外のなにものでもないのである。

そのときどきの流行へと直対応する梅本克己の変遷きわまりない思想をとらえていくばあい、このようにかれが基本的にスターリン主義を非スターリン化の波にのって理解している以上ではないことからして、あるときはスターリン主義を一国社会主義として規定しつつも、あるときは代行主義的組織論として非難し、ついに今回のように「粛清の論理」にまで矮小化してしまうのだ、ということがあきらかにされねばならない。

梅本克己のこのようなめまぐるしい思想的変遷からして、かれは、あるときは清水幾太郎とともに日本反スターリン主義運動と左翼スターリン主義運動との対立として生みだされた六三年六・一五事件において反革共同キャンペーンに名を連ねてみたり、あるいはまた戦闘的議会主義に陥没したブクロ派の選挙を支持してみたり、さらには「日本のこえ」の総結集に期待をよせてみたり、という政治的変節をたえまなくおこなわざるをえないのだ。こうした思想的変節とそれにもとづく政治的な腐敗行為がもたらされ、ついに今回それが集約的に示されたものであることをわれわれはハッキリととらえ、二度とこのような行為を許さない徹底した追撃を、われわれはおこなっていかなければならない。

B　ブクロ派における反スタ概念の変遷

梅本克己のこのような〝反スタ〟とは違って、こんにち依然として反帝反スタを綱領的立場であるなどと語るブクロ＝中核派における、反スタ概念のきわまりない変遷について、つぎにあきらかにしておきたい。

ブクロ＝中核派における反スタ概念が、こんにちではどのようになっているのかということは、かれら自身がそれを展開しないほどになっている、という事実以上明確にすることはできない。しかし、反帝・反スタの綱領的立場などといいつつも、その内容がいっさい展開されないくらいにまでこんにちのブクロ派が転落してしまっていることは、つぎのようなかれらの歴史的変遷の必然、といわねばならない。

六三年の革共同第三次分裂、すなわちブクロ官僚一派に抗してわれわれが下からかれらを粉砕しあらたに革マル派を結成してこんにちまで闘いぬいてきた、この闘いの出発点において、多くの問題が問われたけれども、そのなかで戦略問題もまた一つの重要な問題として問われていった。この戦略問題をめぐる論争をとうして、かれらが主張したことは、「われわれの世界革命戦略は反帝反スタであるが、日本革命戦略は日本帝国主義打倒なのだ」（本多延嘉）という見解であった。そこにおいては、単純な自国権力打倒主義というような考えがすでに生みだされていたといえる。

この単純な自国権力打倒主義とはどういうことかというと、本来、本質的に統一されている反帝・反スタという戦略を機械的にきりはなし、革命の目標がその組織過程にとってかえられるという誤謬である。本来本質的に統一されている反帝反スタ戦略を、なぜ機械的に分離せざるをえなかったかというと、かれらにおいては、反スターリニズムがスターリニスト官僚打倒に実体化され、日本資本制国家権力打倒の過程で反スターリン主義をいかに実現するか、の問題がぬけおちてしまっているからである。つまりかれらは、日本資本制国家権力打倒の過程における反スターリン主義の戦略・戦術・組織戦術のそれぞれの解明をかなぐりすて、単純に戦略目標を対置するにすぎなかった、ということができる。

これが反スタをスターリニスト官僚打倒に一面化し、単純な自国権力打倒主義に陥っていった根拠であって、だから六三―六五年の原潜、日韓闘争の過程においては、反日帝というかたちで提起されてはいても、反帝反スタとしては提起されなかった。ただわずかに、世界革命戦略は反帝反スタだ、ということが空語的に叫ばれたけれども、その日本革命戦略への適用、これについては語られなかった。

このような、単純な自国権力打倒主義へのブクロ派の転落にたいするわれわれの集中的な批判に、驚きあわてたかれらは「日共は反米民族主義で日帝打倒をやらない」のであり、「日帝打倒の実力闘争が反スタである」などと苦しまぎれの口実をつけはじめた。つまり反スタ＝実力闘争というようなゆがんだ解釈にもとづいて、いちどは機械的に分離した反スタを、こんどは機械的に結合させるという作業を開始した。このような反帝戦略と反スタ戦略の機械的な分離と機械的な結合を称して、われわれは、ブクロ＝中核派の反帝イズムへの転落、というように語ってきたのであり、したがって、反帝イズムへの転落というのは、反スタがないというような単純な問題ではない。反スタが機械的に分離され、そうすることによって反スタ概念が歪曲され、それがまた機械的に結

合されているにすぎない、そういうものとしてかれらの反帝反スタ概念のまやかしをわれわれは暴露してきた。

ところがこのような批判に対応しえなくなったブクロ官僚は、同時に原潜闘争から日韓闘争の過程において、第二次ブント結成の動きにたいして対応できないという事態におどろきあわてて、一九六六年ケルン・パー第八回大会において、いわゆる「ギプスをはめた反帝反スタ」という路線を、今井重雄こと小野田襄二によって定式化しはじめたのである。しかしそれは、反帝反スタ戦略の反帝イズム的転落の枠内で分離し、別個に論じた二つの戦略を、こんどは「目標は同一」であるとか「現代世界は一つ」であるとか、こういうようなギプスでもってあわててつなげたにすぎない。このような「目標は同一」であるとか「現代世界は一つ」であるとかいうのは、あきらかに情勢分析と戦略の二重うつしであって、われわれが変革するために否定的に分析する情勢分析と、変革のための指針を集約した戦略とが、そこでは混同されている。だから今井重雄においては、世界情勢をあきらかにしていくこと、すなわち反帝反スタ、とされざるをえないのである。そして、いわば情勢分析に解消されるようなものとして反スターリニズムの問題が語られたにすぎないことからして、なんら問題の解決とならなかった。

そこで、人を〃スットパス〃ことのすきな岡田新こと清水丈夫が、小野田襄二をスットバしてさいど学生指導の責任者にまいもどった六七年のかの10・8闘争以降、こんにちにいたるまで、ブクロ派においては、こうした反帝と反スタの関連づけという、かれらにとってみれば〃しちめんどうくさい〃ことについては基本的にないがしろにし、「断固日帝と闘う」という路線のもとに技術主義的なのりきりをはかったのである。

つまり「いまわれわれは、好むと好まざるとにかかわらず、朝鮮戦争当時の日共の位置にたっている」とか「日共の火焔びん闘争は誤っていない。その後右翼的に総括したところに誤りがある」などと語り、ついに大衆闘争を直接同時に革命闘争として闘うという革命主義、[redacted]へと転落した。こうして六七年以降のブクロ派の反スタとは、反代々木中央官僚の別名でしかなく、代々木中央の「日帝への屈服」にたいして「内乱的死闘」を単純対置するものでしかないわけである。

このような、こんにちのブクロ派の反代々木中央官僚＝反スタ、という考え方は、もはや六〇年ブントの左翼スターリン主義的なそれと現象的にかわるところのないものであって、ただわずかに、かつては反スターリン主義者であったというおのれの過去を想いだしつつ「反スタ＝一国社会主義打倒」というようなものが形骸化されて残っているにすぎない。

だから、最近だされたブクロ派版の「共産主義者」という非共産主義的雑誌の20号―これはすでに『前進』で発表されたスクラップ論文集でしかない―のなかでただひとつあらたに、党建設にかんする論文がのせられているが、そこにはブクロ派の変質が端的に示されている。

前衛組織においては、本来民主集中制という原則がかかげられなければならないにもかかわらず、この論文では中央集権制のみが強調されている。すなわち前衛組織においては民主主義的中央集権主義が保障されねばならないにもかかわらず、この前半を完全に奪いさり、官僚の立場から中央集権主義を強調していっているにすぎないのである。

しかもそのなかには、つぎのようなことが書かれている。「党員の採用は、厳重な個別審査を必要とするのであり、あるばあいには、党への加入を要望する人があったとしても、その条件がみたされないならば、その人の加入を拒否するだけの権威を党組織は有していなければならない。」一見あたりまえにみえるこのようなことを、かれらがなぜあらためて強調しなければならないのか。それは、いうまでもなくかれらブクロ＝中核派が、反代々木中央の人間でありさえすれば三拝九拝し、「ぜひ組織にはいって下さい」などと対応してきたという過去―なんらの思想闘争もなく、雑炊的組織・統一戦線組織へとブクロ組織そのものを変質させていたことから、いまさらながらその手直しをはからねばならなくなったからである。

同時にそこにおいては、スターリン主義という決定的な問題との対決を回避して党組織を語ってきたかれらの腐敗が、集約的に露呈している、というようにいわなければならない。まさにこのようなこんにちのブクロ＝中核派の思想的頽廃、官僚主義的な組織の腐敗、これらを規定している本質的な問題こそ、われわれが一貫して暴露してきた反帝反スタ戦略の反帝イズム的理解であり、その反帝イズム的堕落の帰結として、かれらの本質そのものにおける反スタ＝反代々木中央官僚というものへの変質にほかならない。

かかるものとして、かれらの鼻の頭にぶらさがっているにすぎない反スタの鼻環を、われわれは無慈悲にむしりとり、その顔面にわれわれの鉄槌をあびせていくという最後の作業にとりかからなくてはならない。

C　反帝・反スタ戦略の革命性とわれわれのたたかい

そうであるとするならば、さいどわれわれは、われわれ自身の革命戦略の内容とその今日的意義について、簡潔に確認しておかなければならない。われわれにおいて、反帝反スターリン主義戦略は本質的に統一されているとさきほどのべたけれども、これはいったいどういう意味であるのか、という問題についてさいしょにあきらかにしておきたい。

われわれが反帝反スタ戦略を本質的に同一のものとしてとらえていくということは、まず現実的にみていくならば、帝国主義とスターリン主義の相互補完と相互反撥の現代世界に生きる革命的プロレタリアの戦略としてそれが提起されたのだ、ということを明確にしなければならない。あきらかにスターリン主義は、レーニンが『帝国主義論』で規定していった社会民主主義とはことなる。すなわち社会民主主義は「帝国主義の余剰によって買収された労働貴族とそのイデオロギーにほかならない」、こうレーニンは社会民主主義を規定していっており、それゆえ社会民主主義の粉砕は、帝国主義打倒の一環として提起される。

しかしながらスターリン主義陣営は、全体として各国帝国主義の戦争と侵略に反対し、労働者階級の味方であるかのようにみせかけつつ現存しているばかりでなく、さらに帝国主義各国の内部においては、スターリン主義とその党は、一国社会主義と二段階革命戦略とによって革命運動を敗北にみちびいている、特殊な存在である。スターリン主義国家と党、国際共産主義運動とにより、

プロレタリア革命の敗北がもたらされているがゆえにわれわれは、これにたいして帝国主義打倒・スターリン主義打倒の戦略をかかげて闘ってきている。すなわち「各国帝国主義の内部においては、スターリン主義とのイデオロギー的、組織的たたかいなしに、帝国主義国家権力の打倒は現実的になしえず、また世界帝国主義の打倒は、スターリン主義国家権力の打倒とともに永続的に完遂されないかぎり、プロレタリアートの普遍的解放は実現されない」（『共産主義者』17＝18号小島論文）とするゆえんである。だからわれわれが日本で革命運動を推進していくばあいにも、このスターリン主義との対決、すなわちスターリン主義者党の解体とそのイデオロギーからの脱脚を、プロレタリアートにうながしていかなければならない。そのことなしには、帝国主義国家権力の打倒は完遂できないからである。このようなものとして、反帝反スタ戦略は論理的につながっているということをあきらかにしなければならない。

帝国主義とスターリン主義の両陣営が存在している現代に生きる以上、われわれはかかる戦略のもとに闘っていかねばならないわけであるが、それは歴史的に述べるとどのようになるのか。マルクス時代、すなわち産業資本主義段階における革命戦略は、反資本主義であった。だがしかし一九〇〇年頃をさかいとして資本主義が帝国主義段階へと突入することによって、帝国主義のもとに生きる世界プロレタリアートの戦略は、反帝戦略へと発展した。この反帝戦略のもとに、一七年のロシア革命は実現され、帝国主義打倒・世界革命の砦として、労働者国家が生みだされた。

ところが、すでにのべたように、革命ロシアの孤立、ロシアの政治・経済的後進性、世界革命の遅延、このような三点を外的条件として、一九二四年にスターリンによりうちだされた「一国社会主義」の神話と、それへの左翼反対派の敗北、三〇年のスターリン・テルミドールの完成、このようなスターリン主義体制の確立にもとずき、その打倒が全世界プロレタリアートの課題となったわけである。マルクスやレーニンがかつて問題としたことのないあらたな社会的存在として、スターリン主義の打倒を問題にせざるをえなくなったのである。

このゆえに、現代革命の戦略は反帝・反スターリン主義世界革命戦略として、帝国主義国家権力のみならずスターリン主義国家権力の打倒を、したがって国際共産主義運動の変質をも突破していく闘いを媒介とした各国帝国主義国家権力の永続的打倒を、実現していくものでなくてはならない。

われわれの反帝反スタ戦略に反対する諸君（たとえばブントの諸君）がいるわけだが、かれらのばあいは、革命ロシアの変質を生みだした孤立、後進、世界革命の遅延という外的条件を問題にすることはあっても、二四年のスターリンによる「一国社会主義理論を変質の本質的転換点としてみようとはしない。そしてただもっぱら、帝国主義列強の存在と、世界帝国主義が同時的に打倒されなかった問題へと、論点をすべらせ、したがって、反帝闘争一般（しかも「世界一国同時革命」などという支離滅裂なもの）へとかれらの戦略は歪めちぢめられらざるをえない。そこに、スターリン主義の呪縛からなんら脱脚しえていない、そのいみで左翼スターリン主義者の本質が端的に示されている、といわなければならない。

反帝反スターリン主義戦略を、現実的にも歴史的にも本質的に同時なものとしてとらえていく、という基本的立脚点にのっとり、日本革命戦略そのものをどうとらえていくのか、という問題についてつぎにふれよう。いうまでもなく日本革命は、反帝反スタ世界革命戦略の一環として実現されなければならない。ブクロ＝中核派のように、世界革命は反帝反スタ、日本革命は日帝打倒、というようにきりちぢめてはならない。日本革命における直接的な戦略目標が、日本資本制国家権力打倒であり、スターリン主義国家権力打倒ではないとしても、これを実現する革命闘争や大衆運動にはつねにかならず反帝反スターリン主義世界革命戦略が適用されつつ展開されるのである。

ところが後者の問題（戦略の適用の問題）を無視して、あるいは「綱領的立場」化してしまうならば、前者（直接的な戦略目標の設定）が自立化され、そうすることによって自国権力の打倒主義がうみだされるのである。このようなブクロ派の腐敗と対決しつつ、われわれは日本資本制国家権力打倒の過程において、スターリン主義者党の革命的解体とそのイデオロギーからの脱脚を、労働者階級にうながしていかねばならない。いいかえるなら、スターリン主義者党の革命的解体をとうして日本資本制国家権力の打倒を実現し、この日本革命を反帝・反スターリン主義世界革命の有機的一構成部分とした世界革命の展望をあきらかにしていかなければならない。

このように日本革命を考えていくばあい、スターリン主義者との熾烈な党派闘争は今後さけてとうることのできないものである。ブクロ官僚のように、スターリン主義者は「反革命」だとか「武装反革命」だとかレッテルをはるだけでは、けっしてかれらと対決することはできない。スターリン主義者は、革命の名において革命を絞殺していく特殊な存在であり、そのようなスターリン主義者の本質を暴露し、労働者階級をその呪縛からときはなっていかなければならない。

このようなときに、「内ゲバ一般をやめるべきだ」とか、あるいはまた「日共との対決は内ゲバではなく外ゲバの範疇に入る」とか語ることによっては、現代世界の歪曲を突破していく革命的左翼の課題にこたえることはまったくできない。あえていえば、反代々木諸派のなかにおけるこんにちの党派闘争の暴力的事態以上に、スターリン主義とのもっと決定的な対決が、今後革命遂行過程において問題となるのであり、プロレタリアートがソヴェトを実体的基礎として武装決起する過程において、かれらに鉄槌をあびせ解体していくための、明確な戦略と組織方針をもたないかぎり、左翼反対派の歴史的敗北の二の舞い、三の舞いは必然だということを、はっきり確認しておきたい。

また、このような戦略をかかげてわれわれが闘っていくばあい、西ヨーロッパにおける「反スタ社会主義」というグループとは明確に違った、日本反スターリン主義運動の組織論における独自性をもわれわれはあきらかにしておかなければならない。なぜならば西ヨーロッパの「反スタ社会主義」のグループは、前衛党といえばただちにスターリン主義的党組織と等置し、その結果前衛党を否定する。そもそもかれらは、レーニン的「パルタイ」という言葉そのものに反撥するという状態であり、それが西ヨーロッパにおける反スタ諸組織の現実であるということを、われわれは明確にみておかなければならない。こうした「反スタ社会主義」グループの決定的な誤謬は、レーニン的な前衛党とスターリン主義的

に歪められた前衛党とを等置しているばかりではなく、レーニンの前衛党論の内部にはらまれていた一定の限界を突破していく組織論へのアプローチが存在しないのである。

いうまでもなく、レーニンが『何をなすべきか』という本のなかでのべた前衛党は、非合法のロシアにおいて、職業革命家によって構成されなければならない、とし、この職業革命家の政治的グループを中央委員会とし、そして亡命者の理論的なグループを機関紙編集局とし、この中央委員会と機関紙編集局の二本だてでくみたてられていった。

だがしかし、ここに大枠として存在している、いわゆる「職業革命家集団としての前衛党」の理解は、特殊非合法なロシアのなかにおいて帰結された歴史的限界性につきまとわれている。のみならず、前衛党が前衛党として形成されなければならない必然性—プロレタリア階級の自己組織化の手段としての必然性—に関するプロレタリア階級闘争における主体的な解明が十分なされなかった限界点としても、同時にわれわれはあきらかにしなければならない。

なぜならば、プロレタリア革命は、職業革命家によって実現されるのではなく、また労働者階級の外部からの職業革命家からの指導によってのみなされるのでもない。その存在からして革命の主体として本来的に措定されているプロレタリアート、にもかかわらず社会民主主義やスターリン主義に汚染されることによって、革命主体としての階級的な立場をうしなってしまっている、プロレタリアートのこの現実を意識的に突破していく革命的共産主義者の前衛組織として、プロレタリア党は創造されねばならない。そのプロレタリア党をテコとしたプロレタリア階級の階級としての組織化、これを基礎とすることなしにはプロレタリア革命の勝利的実現は不可能である。したがって、この前衛党は、実体構成においてもプロレタリア階級の内部に実存するものとして創造されていかねばならない。であるがゆえにわれわれは、レーニンの「党＝職革集団」という規定を、前衛党にかんする提起そのものの意義にもかかわらず、職革集団的な党組織論の限界として克服し、プロレタリア階級内部に実存するプロレタリア党として、本質的にとらえていかねばならない。

プロレタリア党にかんする、そのような本質的な規定を明確にすると同時に、さらにわれわれはかの第三次分裂において、ブクロ官僚の大衆追随主義的運動論との徹底的な対決を理論的におしすすめ、組織本質論にとどまることなく—つまり組織とはなにか、という本質的な規定の段階にとどまることなく—組織現実論を、闘争論や運動＝組織論、あるいは党建設論として、それを理論的に解明しそれを武器にしてはじめて、こんにちのわれわれの闘いの基盤をうちかためてきた。反帝・反スタ戦略のみならず、この組織論における本質的優越性、その内容をさらに主体化し、理論的発展をかちとっていかなければならない。

海老原問題をあらたな契機としたブクロ＝中核派など反代々木行動左翼集団、反代々木同伴知識人にたいする、苛責ない鉄槌、あるいは無慈悲な党派闘争、これらもすでにのべた組織現実論の一環としての党派闘争の理論的解明を基礎としておしすすめられているのである。したがって、われわれはその理論的教訓化を基礎にしつつ、ブクロ＝中核派の革命的解体をとうして、わが反スターリン主義運動の組織的な強化をはかっていくのでなければならない。

いうまでもなく、諸君たち自身が展開している高校生運動は革命的学生運動の一翼として、したがって同時に、反帝反スターリン主義をその戦略とする革命的共産主義運動の一環として同時に形成されているのであって、そうした革命的共産主義運動への、したがって革命党への、党的自覚をもかちとり、不断の理論的・組織的追求を基礎にしながら、こんごの闘いを圧倒的におしすすめていっていただきたい。

以上をのべて、わたくしの講演を終ることにしたいと思う。

（一九七〇年一〇月三日）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〔九頁上段からつづく〕その根拠をあますところなくあきらかにし、それこそがかれのいうところの「革命の論理」でもってかれの思想を永久に抹殺していくために、われわれは奮闘しなければならない。

こんにちの梅本の思想的空洞化は、そもそもかれにおいては思想とよぶべきものがまったくなく、ただもっぱら流行への対応主義にとどまっていることの必然であるといわざるをえない。思想なき流行への対応主義とはいったいなにか。

一九五六年のかのハンガリア革命の勃発と、クレムリン官僚による労働者人民の虐殺、かかる事態にたいして痛憤を覚え、いわゆる〃社会主義〃国家の内部でうみだされた労働者階級の武装決起とその敗北という問題への主体的対決をとうして、そして哲学的主体性を革命運動の現実問題へと具体的にアプローチしていくことをとうして、スターリン主義者でしかなかったおのれとの断絶をかちとり 〔九頁下段はじめにつづく〕